

今の世でも、母親の悲しみと贖罪の想いは……

「こけしは、『子消し』とも書く」と聞いたことがあり、いつか言葉の意味を知りたいと思っていたので、書店で「こけしの発生の謎―闇の中の間引き供養考―」が目が止まり、早速購読した。

帯に「祝うべき生命の誕生は、それが女兒ゆえに闇の中に… 愛らしくも哀しげに微笑む『こけし』は、我が子を手をかけながら葬儀も供養もできなかった母の祈りの対象であり、やむなく行った夜叉の仕業への贖罪の証ではないのか。こけしの不思議さの秘密を解き明かす。」とある。

著者は、その時代の為政者の政り事、自然条件、庶民の中の伝承、迷信、俗信、習俗、近江発生の木地師集団の歴史的背景、等々の多方面から多くの史料、文献に触れながら、「一つの推論、推定でしかない。」と断りながらも、こけしは、なぜ東北に生まれたのか？ なぜ東北だけなのか？ なぜ温泉地に関係するのか？ なぜ女の子の姿だけなのか？ なぜ菊の図柄なのか？ 「秋保こけし」の頭の乙の字の意味は？ なぜ「鳴子こけし」の首の鳴る音は口で鳴らす「ほおずき」の音に似ているのか？ 等々の「こけしの発生の謎」に迫る書であった。

そして、「間引きをしなければならなかった母親の悲しみと、せめて供養したいという庶民の願いをこけし木地師が聞き届けたことが、こけし発生の端緒をなしたのでないか。こけし木地師は、権力者に対しては物云わぬ反抗者であり、庶民に対しては心やさしき理解者であった。」と、後書きで述べている。

読み終えて、先に「妊娠・中絶に関する覚え書きメモ（「雑学BN」の覚え書関係（I）P、2005. 4.08.：参照）」で触れたように、最近でも、「16才～49才の女性の1/6人が妊娠中絶の経験あり、その7割が罪悪感、罪の意識等で自らを責め続けている」。

また、「20才未満の人工妊娠中絶手術報告件数は、年間 34,745件（単純計算で95人/日）」のデータを思い出した。

これらデータの現れの一側面か、日頃、各神社仏閣の水子地藏に多くの供え物を目にしていることから、こけしが発生した時代と現在の社会情勢とではその要因は大きく違うだろうが、今の世でも、お腹の中の生命の母親としての女性の悲しみと贖罪の想いは続いており、また、日の目を「見（み）ず子」→水（みず）子も多いということか……。

（2006年9月12日 記）